

令和元年6月19日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284137

研究課題名(和文)施設間移行と生存経路多様化の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Study on Inter-institutional Transitions and Life Course Diversification

研究代表者

飯嶋 秀治 (IIJIMA, Shuji)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：60452728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：先行する施設研究では、個別施設研究か喩としての施設研究になるのに対し、経験的に一定数の入所者が施設を移行しながら生きていることに鑑み、児童福祉施設、精神障害施設、自立支援施設専門家が共同研究することで、施設間移行者の実態を把握し、生存経路多様化の介入を試みることを目標とした。結果、3種の入所者の施設移行には、同種内施設間移行と異種間施設間移行、直接移行と間接移行、同一人物移行と異世代移行などの類型があること、だがそれは一定数に留まり大多数はそうにならないこと、他方でその実態把握するには同一自治体内で研究する必要があること、また全制的施設などの概念が有効性を失っていることなどを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では児童福祉施設出身と野宿者に強い相関が指摘されてきたが、精神障害施設との間には弱い相関がみられた。但し個別施設研究から導いた暫定結論のため、実態把握には同一自治体での調査もしくは全国調査が必要とされることが明らかになった。

またかつては全制的施設がという概念が有効性を担ったが、人新世(地球社会)時代の現在では喩としての施設研究があるように施設が地球化している面があり概念を更新する必要があることが明らかになった。

最後に、生存経路を多様化する介入点は入所者と職員及びその環境との相互作用となるので、これまでの現地人の視点把握の人類学から、相互行為把握の人類学への転換が必要になることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In the previous studies on the total institutions, mainstreams have focused on the individual institution like the child protection, the mental hospital, and the independence support institution for homeless people and some minor studies focused on this neo-liberal society as a whole. In our study, we focused on the intermediate range between the individual study and the metaphorical study.

Our findings are (1) there are two types of inter-institutional transitions; the same type inter-institutional transition and the different type inter-institutional transition, (2) there are two pattern of inter-institutional transition; the direct transition and the indirect transition, and (3) there are two kind of inter-institutional transition; the individual transition and the parent-child transition. However those cases are not the major cases in our institutions. Moreover in order to do more empirical research, we found we have to do those research in the same municipal.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：施設間移行 生存経路 全制的施設 暴力 介入 臨床心理学 虐待 エスノグラフィ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は3つある。

第一には、社会学のアーウィン・ゴッフマン 1984(1961)『アサイラム 施設被収容者の日常生活』の「全制的施設 (a total institution)」概念に始まり、社会学、人類学、近年では臨床心理学でも始まりつつある個別施設研究の蓄積である。

第二には、こうした研究蓄積が新自由主義時代の現在において、グローバルに展開されはじめたのではないかとする人類学者内藤直樹と社会学者山北輝裕編 2014『社会的包摂 / 排除の人類学』にみられる喩としての「全制的施設」研究である。

ところが、この両者の間には複数の、大きな課題が横たわっており、児童福祉施設の研究者や精神障害者施設の研究者、ホームレス自立支援施設の研究者などが集うと、それぞれが研究を蓄積してきた施設に、他の施設からきて、あるいは、他の施設へと移行してゆく人々の存在が浮かび上がってきたのである。この課題は、第一研究のように個別施設研究ではその種の現象は周辺化され、第二研究のように喩としての施設研究では地球全体が施設として見立てられてしまうため問題が消失してしまう。それゆえこの両者を架橋する中範囲の研究が必要とされた。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きく分けて2つあった。

第一に、「全制的施設」と呼ばれるような各種施設で、施設間移行の実態がどのようになっているのかを把握することである。

また第二に、一般に福祉制度は自助支援と想定されていることから現状に施設間移行の実態があるとするればそれをどのように個々の生存経路の多様化に向けるのかを考案・実装することである。

第二の論点は想定であったものの、そうした実態がなくともこの施設間移行の研究メンバーであれば、その担当施設が主に入所者の経年にそって並んでいるため、少なくとも将来予測の点で本研究会での知見は未来の私たちの研究にとって有意義なものとなると見込まれた。

3. 研究の方法

上述の2つの目的を達成するため、本研究では異種施設の研究者での共同研究会を組んだ。具体的にはコアメンバーが代表の飯嶋秀治(児童福祉施設)、間宮郁子(精神障害者通所授産施設)、北川由紀彦(野宿者自立支援施設)である。

また上述の後者の課題に応じてゆくには、核は現在の諸施設での職員と入所者の相互行為であると想定し、コアメンバーには学校職員などのカウンセリングを行ってきた増田健太郎(臨床心理士)に入っていた。

全員国内調査の研究者でそろえ、人類の多様な生態を把握するというより、具体的な課題の解明を想定し、各担当施設の(1年目)歴史・統計、(2年目)民族誌・課題、(3年目)比較・代替案、(4年目)実装・検証、(5年目)研究成果公開と計画し、この4名が担当する以外の施設についてはその都度必要なゲストスピーカー(ランジャナ・ムコパディヤヤー、米川寛、永野咲、渡邊守、佐藤文、阿部正美)を招いた。

4. 研究成果

すでに述べたように、先行研究では個別全制的施設研究の蓄積と喩としての全制的施設がある間に、教育学[松本 1987]や社会学[妻木 2011]などから、児童福祉施設と野宿者との強い相関は指摘されており、野宿者の1割前後が児童福祉施設出身であることが東京[岩田編 2003]や大阪[妻木 2011]の研究から、指摘されてきた。

そこで児童福祉施設、通所授産施設、野宿者自立視線施設での10年間のケースを検討をした結果、第一目的の施設間移行に関しては、2類型、2パターン、2種類の施設間移行があることを識別した。

2類型とは、同種内施設間移行と、異種間施設間移行であり、前者は児童福祉・精神障害・野宿という各施設であつかう入所者を中心にした諸施設がある。児童福祉施設であれば、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、里親、ファミリーホームなどの諸施設を中心にした諸施設の集合があり、これらの間の施設移行の場合「同種内施設間移行」とした。他方で、こうした各施設集合間を越境する場合、「異種間施設間移行」とした。各諸施設集合の周辺は異種の諸施設集合と重複する可能性はあるが、今回の研究会ではこうした課題は今後の課題とした。

次に、2パターンとは、ある施設から別の施設へと直接移行する施設間移行であり、直接施設間移行とした。もうひとつはいったん施設を退所したのちに再度施設に入所するという施設間移行であり、間接施設間移行とした。

最後に、2種類とは、同一人物が施設間移行してゆくものを「同一人物施設間移行」とし、他方で親の世代と子どもの世代が別の施設に入所している場合を「異世代間施設間移行」とした。

とはいえ、3施設間で相互検討したところ、当初想定した「異種間施設間移行」「直接施設間移行」「同一人物施設間移行」のケースは1割に満たないと判断され、他方で各施設での「異種間施設間移行」「関節施設間移行」「異世代施設間移行」のケースが経験的な施設間移行の印象をもたらしたのではないかと推察された。本研究では、児童福祉施設、通所授産施設、自立支援施

設の存在する場所がそれぞれ別自治体であることに加え、今回主題となった児童福祉施設や通所授産施設の具体的な施設が、それぞれの施設集合内ではユニークな試みをしていることからフィールドに選定されていたため、代表性の問題もあった。それゆえ、本研究の実態を把握するためには、全国規模での統計をとるか、さもなければ同一自治体での研究をしなければ把握し難いことが次なる課題となった。

後者の生存経路多様化については上述したように、「異種間施設間移行」「直接施設間移行」「同一人物施設間移行」のケースがマジョリティではないために、問題の前提が消失した形になったものの、その場合に想定された入所者の経年にそって並んでいる利点にかんしては検討したが、各施設集合では焦点化している入所者を中心に考えるため、その他の問題は周辺化される構造があり、事前にどのような問題が生じるかという想定で組織が体制を整えるような動きは想定されなかった。他方で、諸施設集合の外部がすでに新自由主義的な施策で自立して復帰する場所ではなくなっており、「全制的施設」概念の臨界が指摘された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 6件)

飯嶋秀治、施設間移行と生存経路多様化の基礎的研究—児童福祉施設・通所授産施設・(野宿者)自立支援施設の連携研究から見えてきたこと、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年

飯嶋秀治、児童福祉施設の施設間移行と生存経路多様化—歴史・統計・事例・施設間移行、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年

間宮郁子、通所授産施設の施設間移行と生存経路多様化、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年

北川由紀彦、自立支援施設の施設間移行と生存経路多様化、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年

増田健太郎、児童福祉施設と施設間移行と心理的ストレスの援助のために、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年

IIJIMA Shuji et al., Basic Study on Inter-institutional Transitions and Life Course Diversification, International Union of Anthropological and Ethnographic Sciences, 2018年

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/iijima/?page_id=967

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：間宮郁子

ローマ字氏名：MAMIYA Ikuko

所属研究機関名：国立障害者リハビリテーションセンター

部局名：福祉機器開発部

職名：研究員

研究者番号（8桁）：30455381

研究分担者氏名：北川由紀彦

ローマ字氏名：KITAGAWA Yukihiko

所属研究機関名：放送大学

部局名：教養学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00601840

研究分担者氏名：増田健太郎

ローマ字氏名：MASUDA Kentaro

所属研究機関名：九州大学大学院

部局名：人間環境学研究院

職名：教授

研究者番号（8桁）：00601840

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。